

*A People Called Cumberland Presbyterians*¹ 第5章訳出に関する前書

宮城妙子

(東京基督教大学非常勤教員)

1. 本稿の目的

本誌 26 号において、中会主義教会のアメリカでの発展に関しての第 1 章を訳出した²。第 1 章における最重要事項は、1709 年に中会が、1716 年に大会が、フィラデルフィアに組織されたことであった。今回訳出する第 5 章においては、1810 年にカンバーランド中会がケンタッキー大会から分離し、新たにカンバーランド長老教会を設立することがメインのテーマになる。故に、なぜカンバーランド中会がケンタッキー大会から分離したのかを明確に提示することが 5 章訳出の目的である。分裂の原因はアメリカで中会が設立された頃にまで遡る。

第 2 章において、大会設立時すでに、『ウェストミンスター信仰告白』への全幅的同意（署名するもの、口頭で誓約するもの両方を含む。英語では subscription to a creed と表現されている）を大会全体に課すべきだと主張するスコットランドとスコットランド系アイルランド人会員（Old Side）と、それに全面的に同意できないニューイングランドのバックグラウンドを持つ会員（New Side）の二派の対立があったことが記されている。ニューイングランド派のリーダー的存在であった、ジョナサン・ディキンソン（Jonathan Dickinson）は、1721 年のフィラデルフィア大会で、スコットランド人、及びスコットランド系アイルランド人の会員が『ウェストミンスター信仰告白』への全幅的同意を義務づける決定を大会で提案したことに対し、大会内の調和を保つ妥協案として次のような 4 カ条の提案を行った（アンダーラインは筆者）。

(1) 我々は、中会と大会に教会政治の完全な執行権があることを認める。ま

1 Ben M. Barrus, Milton L. Baughena and Thomas H. Campbell, *A People Called Cumberland Presbyterians: A History of the Cumberland Presbyterian Church* (Eugene: Wipf and Stock Publishers, 1998).

2 『キリストと世界』26 号（東京基督教大学、2016 年 3 月）115-150 頁

た。中会と大会はキリストの御名によって、あらゆる点で「教会訓練 (church discipline)」に関する問題を解決する権威を持っている。また、各個教会における「教会訓練」の権威は、教会役員もしくは教会役員のみ委ねられることを認める。

(2) 我々はまた、教会政治における、「教会訓練」に関する時間・場所・実行方法のような付随的な事項について必要が生じた際、「あらゆることが適切に秩序をもって行われる」ためのみ言葉の一般的なルールに従って決定を行う権限が、各教会会議 (ecclesiastical judicatories) にあることを確認する。こうした決定が条例 (acts) とされる場合、良心に照らしてこれらに同意しない者にはその条例が強制されない場合に限り、我々はその条例を認める。

(3) また我々は、大会がつくった「指針」の遵守を「教会訓練」のすべてを考慮してすべての大会メンバーに促すことについて、下位決定機関が良心に照らしてその「指針」に反対しうることを条件に認める。

(4) 我々は上訴があらゆる下位または上位決定機関からなされること、またそれらの組織はそのような上訴を考慮し、決定する力を持っていることを完全に認める。(16)³

アンダーラインの箇所が示すように、全幅的同意派が行った提案に対してディキンソンは、会員個人が各自の良心によって教会会議の決定に反対する権利をもつことができることを、妥協案に楔として盛り込んでいる。

また、1729年、ニューイングランド派のジュディディア・アンドリュース (Jedediah Andrews) が、「スコットランド人と、スコットランド系アイルランド人は大会の会員の条件として『ウェストミンスター信仰告白』への全幅的同意を求めることに賛成している… ニューイングランドのバックグラウンドを持つ会員は、『ウェストミンスター信仰告白』を中会主義教会の基準とすることに賛成はしているが、それを正統性の試金石とすることや、聖職者として認知するための根拠とすることにはどうしても賛成しなかった」(18)と手紙に記していた。このように、大会設立後のごく初期から『ウェストミンスター信仰告白』の全幅的同意に関して対立があったことがわかる。

次に、ニューイングランド派にとって、『ウェストミンスター信仰告白』のどの

3 以下のカッコ内の数字は *A People Called Cumberland Presbyterians* のページ数を示す。

告白が全幅的同意を困難なものにしているのかを明確にする必要がある。それは、第3章「フンティアの中会主義：新しい覚醒」、及び第4章「聖職者への圧力—論争の激化」で明らかにされる。たとえば、第3章においては以下のような記述が見られる（アンダーラインはいずれも筆者）。

（第二次リバイバル時、リバイバル派の牧師）マックグレディ（James McGready）とその仲間たちは野外集会において、伝統的な中会主義の選びの概念から外れ、修正されたカルヴィニズムを説教した。神にのみ知られている選ばれた人という概念の代わりに、マックグレディは、人はいつ、どこで回心を経験したかを知ることができると主張した。（42）

カルヴィニズムは、ニューイングランドのピューリタン、ジョナサン・エドワードズ（Jonathan Edwards）、サミュエル・ホプキンス（Samuel Hopkins）、ティモシー・ドワイト（Timothy Dwight）、その他の人々が、逐一、人間の自由意志の強調と、選び及び予定論の批判により『カルヴィニズム』が『エドワードニズム』へ変わってしまったことによって弱められていった。（47）

また、第4章にも以下のように記されている。

委任委員会は、ホッジ（William Hodge）、マックギー（William McGee）、ランキン（John Rankin）が選びを否定して、すべての人は真の回心に到達するまで、十分な恵みと、自身の中に更なる恵みを得る力を持っていると信じていることを糾弾した。（64）

以上の箇所から、『ウェストミンスター信仰告白』の第3章「神の永遠の聖定（Of God's Eternal Decree）」、つまり、「選び」「予定論」がニューイングランド派（リバイバル派）が全幅的同意に応じられない「告白」になっていることは明らかである。このことを明確にするために、まず、前回訳出した第1章後の第2章から第4章までを以下の2節で要約する。

2. 第2章から第4章までの要約

2.1 「大覚醒 (Great Awakening)」の時期

フィラデルフィア大会が1716年に設立された当初から、教派内では、ニューイングランドの背景を持つジョナサン・ディキンソン (Jonathan Dickinson) をリーダーとするニューイングランド派、つまりリベラル派と、スコットランド系アイルランド人の背景を持つ『ウェストミンスター信仰告白』全幅的同意派の対立があった。それに加えて、「大覚醒」において大きな影響力を持った、スコットランド系アイルランド人のウィリアム・テネント (William Tennent) が1718年にアイルランドから渡米した。彼はもともと中会主義教会派ではなく、英国国教会のピューリタンであったが、監督の教会制、儀式中心、アルミニウス派的考えに賛成しない一方スコットランド系アイルランド人中会主義者の全幅的同意の考えとも相いれずに、リベラルなニューイングランド派と協力関係を持つようになった。この3つのグループを中心に、中会主義教会の流れを「大覚醒」との関係で要約する。

全幅同意派のジョージ・ギレスピー (George Gillespie) の提案から発した両派の攻防

全幅同意派のジョージ・ギレスピーは、1721年、フィラデルフィア大会で、ある提案をし、それが採択された。それは、以下のように曖昧なものであったが、次の大会において『ウェストミンスター信仰告白』の全幅的同意を義務付ける提案をするための準備の提案であった。

私たちは何年にも渡って、最良の改革派教会の中会主義者によって行使されたように、中会主義政治と教会訓練を行使してきた。私たちは、この国の特質と政体が許す限り、もしある兄弟が、私たちの教会政治や教会訓練において、より良いものが実行されるために大会に対してある条例の制定を求める案を持っているならば、彼はそれを次の大会に提案すべきだと考える。(15)

この提案とは、『ウェストミンスター信仰告白』への全幅的同意を大会全体に課すものであったと思われる。これに対してニューイングランド派のリーダーであるディキンソンは、本稿1. で記したように、それは個人の良心に基づいて、個人的

になされるべきであるという「4カ条の提案」を行った。

しかしながら、全幅的同意派のデラウェアにあるニューキャッスル中会は、1724年に『ウェストミンスター信仰告白』への全幅的信頼を単独で採択し、中会内でそれを実行した。それに続き、1727年、ニューキャッスル中会ルイス教会のジョン・トムソン (John Thomson) は、大会において全幅的同意を徹底させるため「6カ条の建議」を行った。(17) これに対し、1729年大会においてニューイングランド派ディキンソンが妥協策として再び「信条採用決議 (Adopting Act)」を提案し、それが採択された。この法は、2つの重要な概念を確立した。第一に、『ウェストミンスター信仰告白』の教理は本質的で必須であり、他のものはそうでないということ。第二に、本質的で必須な条項であっても、違う教会会議によってさまざまに解釈されるかもしれないので、ある人物が疑念を抱いていると教会会議が聞いたなら、それらの疑念が本質的で必須な条項に反しているか一致しているかに関して結論を出すということである。(19)

テネント親子の「大覚醒」での働き

このように、ニューイングランド派 (New Side) と全幅的同意派 (Old Side) が『ウェストミンスター信仰告白』に関して対立している間、ウィリアム・テネントが1726年、フィラデルフィア近くのネシャミニー (Neshaminy) に定住し、ペンシルバニアに入植したスコットランド系アイルランド人たちのために聖職者の必要が急務であることを感じ、自分の家で若い聖職者の教育を始めた。そして1733年までに彼の息子——ギルバート、ウィリアム・ジュニア、ジョン——、及びサミュエル・ブレア (Samuel Blair) がこの丸太小屋大学コースを修了し、フィラデルフィア大会に受け入れられた。1732年、ニュージャージーのフリーホルド (Freehold) でジョン・テナントが行った説教で大覚醒に火が付いたと言われている。(21) エール大学卒業のエレアザー・ウェイルズ (Eleazer Wales) が、1735年にキングスンに定住し、テネント親子の働きに加わった。ジョン・クロス (John Cross) は1735年から1736年まで、バスキングリッジ (Baskingridge) ですぐれたリバイバルを導いた。もう一人の丸太小屋大学出身のサミュエル・ブレアは、最初、1733年にシュルーズベリー (Shrewsbury)、次にファッグスマナー (Fagg's Manor) に移り、そこで1740年に丸太小屋大学を設立した。1738年、彼らはニューブランズウィック中会を立て上げ、ここで接手を施された丸太小屋大学出身の教職志願者 (candidate) が New Side の教職となっていくた。

同年、ニューヨーク中会も設立されたが、リバイバル運動が拡大するにつれ、フィラデルフィア大会はリバイバル運動を縮小することを意図した決議を2つ可決した。Old Sideによって可決された法律はOld SideとNew Sideを分ける境界線を明らかにするいくつかの問題を含んでいた。第一に、オールドサイドはリバイバル運動の方法と、巡回説教をすることに反対した。第二に、彼らは『ウェストミンスター信仰告白』に対しての厳格な全幅的同意に賛成した。第三に、彼らは、ニューヨークやヨーロッパの大学よりも、リバイバル精神と個人的敬虔さを強調する丸太小屋大学で教育される教職志願者に反対した。最後に大会は、伝道師・教職者だけでなく神学生になる、または按手の前に聖職志願者の資格を判定する権限をもつと考えた。(22)

フィラデルフィア大会の分裂

しかし、1739年にイギリスからジョージ・ホイットフィールド (George Whitefield、イングランド国教会の聖職者、説教者、メソジスト信仰復興の指導者) が到着すると、彼とニューヨーク中会、ニューブランズウィック中会との協力関係によってリバイバル運動はさらに広範囲に広がった。ホイットフィールドが到着する以前は、セオドラス・ジェイコバス・フリーリングハイゼン (Theodorus Jacobus Frelinghuysen ドイツ改革派教会の聖職者で、ニューブランズウィックで、リバイバル運動を導いていた)、ジョナサン・エドワーズ、そしてテネント家の働きから起こっていた霊的覚醒は地理的に離れた地域でばらばらに起きていたが、1740年のジョージアからニューイングランドに至る植民地全般へのホイットフィールドの旅の後、点在していたリバイバル運動は一つの広大な霊的覚醒——大覚醒として認識されるようになった。(23)

このような大覚醒に危機感をもったオールドサイドは、1741年にニューサイドに関して、大会に痛烈な抗議書を提出した。それはニューブランズウィック中会の聖職者たちが7つの罪を犯していると抗議するものであった。1) 大会よりも中会が聖職者に直接的な裁判権を持っているという考え 2) 「前述の大会の決議を侮辱する」人物たちへの按手 3) 教会が属している中会の許可なしに、その教会で活動すること 4) 「回心していない聖職者」という説教の中で、ギルバート・テネントが言明した軽率な判断 5) 「墮落した」聖職者に牧会されている教会に出席しないようにと教会員を説得しているニューサイドの行為 6) 御言葉に反する律法の恐怖を説き、人々が「恐ろしい方法で泣き叫び、発作のような騒ぎの中で倒

れてしまう」ようにさせている。そして 7) すべて真実なクリスチャンは自分の回心の方法と時間について知っているという主張。(25) 以上の抗議により対立は激しさを増し、1746年、ジョナサン・ディキンソンが初代議長になりニューヨーク大会が設立され、フィラデルフィア大会は分裂した。

大会の再合同

しかし、1758年ギルバート・テネントの尽力により2つの大会は、「ニューヨーク・フィラデルフィア大会」という新しい大会を組織し、ギルバート・テネントが初代大会議長に就任し再合同した。しかし、この分裂の期間、ニューサイドのニューヨーク大会は聖職者が22名から74名に増え、オールドサイドのフィラデルフィア大会は27名から23名に減少し、ニューサイドが多数派となっていた。この再合同は、統一というよりむしろ吸収であり、18世紀の後半、2つのグループ間の緊張関係は決してなくならなかった。(29)

この2つのグループの対立は、『ウェストミンスター信仰告白』への全幅的信頼に関する考えの違いと、またオールドサイドの抗議書にも見られたような「大覚醒」に関わるもろもろの件に対する考えの違いによっているが、このことがアメリカの中会主義に独自の性格をもたせることになった。これは非常に重要な点である。それは究極的権威を中会に分散させた非中央集権的制度であり、全くアメリカ土着の組織であり、スコットランドやアイルランドの中会主義制度とは一線を画するものであった。(31)

フィラデルフィア総会の設立

1788年にフィラデルフィア総会が組織され、最初の総会が開かれた。総会で示されたアメリカ中会主義の明確な性格は本質的にニューサイドのものであった。しかしフロンティア地域においては、オールドサイドの伝統が依然としてはっきりしており、オールドサイドの聖職者が多数派を占めた。それは、スコットランド系アイルランド人が土地を求めてフロンティア地域へと殺到したことによるものであった。そしてそこに後からニューサイドの聖職者が移動してきて、カンバーランド中会でニューサイドが多数派になった場合には、再び同じ論争が繰り上げられることとなった。

2. 2 「大リバイバル (Great Revival)」の時期

ペンシルバニアからケンタッキーへの入植者の移動(フロンティアの西漸運動)と共に

1746年に分裂していたオールドサイドのフィラデルフィア大会とニューサイドのニューヨーク大会が1758年、「ニューヨーク・フィラデルフィア大会」に再統合された後、大会は1763年チャールズ・ベッティ(Charles Beatty)とジョン・ブレナード(John Brainerd)を宣教師としてフロンティア入植地に送ろうとした。彼らの使命は困窮したフロンティアの住民に説教し、また彼らの状況や、近隣に居住するインディアンへの福音宣教の可能性などを大会に報告することであった。(33)しかし、それはインディアン2部族の蜂起により中断され、3年後、ベッティとジョージ・ダフィールド(George Duffield)が入植地を訪問、説教し、状況を大会に報告した。その後は、1732年にニューキャッスル中会の西地区から独立したド=ゴール中会が宣教師を送っていた。

その後1776年のジェームス・パワー(James Power)に始まり、ジョン・マクミラン(John MacMilan)、サデウス・ドッド(Thaddeu Dod)、ジョセフ・スミス(Joseph Smith)が西ペンシルバニアに定住し、1781年にレッドストーン中会を設立した。彼らに1782年、ジョン・ダンラップ(John Dunlap)、1783年ジョン・クラーク(John Clark)、そして1785年ジェームス・フィンリー(James Finley)が加わった。上記7人の教職者全員が1746年に創立されたニュージャージー大学(後のプリンストン大学)出身であった。1788年から1793年の5年間に12人の教職志願者が誕生し、彼らは大学教育を受けていなかったが、その7人の教職者から訓練を受けていた。そのうちの一人ジェームス・マックグレディが、後に、ケンタッキーに大リバイバルをもたらすことになる。(34-35)

また、デヴィッド・ライス(David Rice)は、ヴァージニア、南西ヴァージニアを経て1783年ケンタッキーに移動し、また翌年アダム・ランキン(Adam Rankin)もヴァージニアから、ケンタッキー、レキシントン(Lexington)に教会を牧会するためにやってきた。二人は巡回牧師の協力により、ジェームス・クロフォード(James Crawford)、テラ・テンプリン(Terah Templin)を福音伝道者(Evangelist)として按手し、1786年10月、トランシルヴァニア中会を設立した。この中会は「カンバーランド川沿いの定住地や、ケンタッキー地方」を含んでいた。(35)

ケンタッキーからテネシーへ（フロンティアの移動に伴って）

テネシーへ永続する教会を初めて設立したのは、サミュエル・ドーク（Samuel Doak）であり、1795年には丸太小屋大学であるマーティン・アカデミーを設立した。またトーマス・クレイグヘッド（Thomas Creaghead）はナッシュビル地域を初めて訪れた中会主義教職者で1785年にはデヴィッドソン・アカデミー（Davidson Academy）の初代学長になった。

大リバイバルにおけるジェームス・マックグレディの働き

大リバイバルが起こる18世紀末のアメリカ全体の霊的状态はどうだったのであろうか。1789年中会主義教会総会報告は「18世紀末のアメリカにおける『公衆道德』は、キリスト教会の継続的な墮落に比例しているという事実を、痛みと畏れの念をもって受け入れた」と告白しているが、それには世紀末の知的風潮が大きく影響していたと見られる。独立戦争の軍隊生活における道德的腐敗、政治的分派の激しさ、フランクリン（Benjamin Franklin）の実利主義的道德観、ジェファースン（Thomas Jefferson）の哲学的理論論、トム・ペイン（Tom Paine）の大衆受けする野卑なユーモアなどが、他の影響と共に働いて、信仰を持たない者の目にはほとんど絶望的に思われる状況をもたらしていた。また辺境地帯は、孤立した単調な生活、限られた娯楽などから、強いアルコールの飲酒、喧嘩、神への冒瀆などを生み、社会的規律の低下を招いていた。またその地域の不信仰に貢献したもう一つの要素は、土地に対する貪欲さだった。このように宗教的覚醒の期は熟していた。（36-37）

マックグレディは、両親がスコットランド系アイルランド人であり、ノースカロライナで育ち、ペンシルバニアで神学を学び、1786年に回心を経験した。ノースカロライナに戻ったとき、彼の説教が大リバイバルを引き起こしたが、彼の罪と偽善を糾弾する激しい説教には賛否両論あり、多くの回心者を出す一方、血で書かれた手紙によりノースカロライナから出ていくように脅しを受けた。（39）1796年、彼は、ケンタッキー、ローガン郡のギャスパール・リバー（Gasper River）教会、レッド・リバー（Red River）教会、マディー・リバー（Muddy River）教会からの招聘を受け赴任した。ギャスパール・リバー教会で1797年大リバイバルが始まると、レッド・リバー教会、マディー・リバー教会の聖餐式集会でも次々と大リバイバルが起こり、1800年6月のレッド・リバー教会の聖餐式においてピークに達した。（41）

マックグレディは、神から離れている罪の結果である地獄の痛み、苦しみに関する説教に加えて、社会的罪—安息日を守らないこと、（神や人を）呪うこと。舞踏会、

パーティー、競馬、賭け事への参加。怒り、悪意、復讐心、短気一などを激しく責めた。また、強いアルコールの飲酒や、理神論者、特に高い社会的、政治的地位にある人たちの偽善をも激しく非難した。

マックグレディの影響

彼のリバイバルの影響を受けたバートン・ストーン (Barton Stone)⁴ は、東部ケンタッキー地方にあるケイン・リッジ (Cane Ridge) 教会、コンコード (Concord) 教会にリバイバルをもたらした。(42) 彼らのリバイバル集会においては、マックグレディのリバイバルと同様に早急な回心の必要を激しく会衆に訴えたため、会衆は死んでしまったかのように倒れたり、青ざめ、震えたりする身体的動きを伴うことも多かった。このような肉体的興奮は大リバイバル運動にとって特別なことではなく、それらは1740年代の大覚醒の時にも顕著だった。ニューイングランドでの大覚醒の指導者だったジョナサン・エドワーズは、大げさなことを好まなかったが、その働きは、目に見える感情的な要素にもかかわらず、神聖なものに違いないと主張していた。エドワーズは真の信仰は感情にも関係があり、生き生きとした感情は肉体にも影響を及ぼすので、もし大衆の中に神の霊の非常に強い影響があるならば、様々な形で顕著な目に見える動きを引き起こす可能性もあると推測していた。(44) 大リバイバルにおいて最も顕著な肉体的動きは、「倒れこむ動き」で、その動きは1800年のマックグレディのギヤスパー・リバー教会での集会で最初に報告されたが、「打ち倒された」数はケイン・リッジでの大集会でピークに達した。その様子はリバイバル反対派でさえ感動するほどで、この現象は年齢、性別、貧富の差、人種、教派に関係なく起こった。

4 Stone は、もともと中会主義者であり、後に彼に従った人々は“Stoneites”もしくは“New Light”の人々と呼ばれた。彼らは聖書からの新しい光を発見したとして、あらゆる人間が作った信条も、教会の政治形態も採用しないと主張した。彼らは後に、元中会主義教職者だったアレキサンダー・キャンベル (Alexander Campbell) の支持者たちに合流し、「キリスト教会 (the Christian Church)」を創設した。アメリカキリスト教史の歴史家たちは、ストーン・キャンベル運動が「キリスト教会」「キリストの教会 (The Church of Christ)」、そして「キリストの弟子教会 (Disciples of Christ)」を生み出したと主張している。彼らの運動は、アメリカの教会史のなかで、しばしば、「回復 (Restoration)」「回復主義者 (Restorationist)」運動と呼ばれ、新約聖書の時代の教会に戻ることを求めている。(筆者訳) (メンフィス神学校校長、イアハート・ブラウン博士 [Dr. Jay Earheart-Brown] による解説)

大リバイバルに対する総会の反応

1801年の総会では、「ケンタッキー、テネシーの境界地域では、神の霊の影響は非常に驚くべき方法で明示されている」と好意的に受け止められ、1802年は「リバイバルの創始者は神であり、その影響は非常に望ましく、ことのほか喜んでいゝ」と前年同様に好意的である。1803年の総会は、「肉体的な動き」については好意的ではないが、リバイバルは確かに神の業であることを認めている。1804年は、リバイバルの影響と広がり称賛し、ある者の回心が神経系の激しい反応を伴うことが「信用できなくはない」と認めはしたが、リバイバル地域の聖職者たちに、人々を感情的激発へと駆り立てることがないように警告した。1805年の総会は依然としてリバイバルを好意的にとらえてはいたが、肉体的影響には当惑し始めた。1806年総会ではリバイバルによる肉体的動きに対して「キリスト教徒には不適切で異常な行為である」という考えを表明した。(48)

大リバイバルの影響

大リバイバルによって、1800年からの3年間でケンタッキーのバプテスト会員は1万人、メソジスト会員は6千人増加した。中会主義教会は、1803年に「何千もの人」が福音を受け入れたが、そのうち多くが、ストーン派 (Stoneites)、シェーカー⁵、カンバーランド中会に移ってしまったと報告されている。この結果教会が増加し、直ちに説教者が不足したが、メソジストとバプテストは巡回伝道者や、農民説教者がいたため問題なかった。しかし、中会主義教会は説教者に正統的教育を求めたので、辺境地域での説教者不足を即座に満たすことが困難になった。

教職者不足に対して

急速に増加した辺境の教会は、中会主義教会の求める教育的資格を与えられた教職者を十分に獲得することに困難を覚え、早くも1792年、トランシルヴァニア中

5 集団生活を行い、宗教的完全、独身主義を信じる、Mother Ann Lee (1736-84) のリーダーシップの下に、1774年に英国から北部ニューヨークにやって来た革新的なキリスト教一派。(筆者訳) Mark A. Noll, *A History of Christianity in the United States and Canada* (Grand Rapids: William B. Eerdmans Publishing Company, 2000), 150. また、リバイバル初期、ケンタッキーにやってきて、カンバーランドの教職者と共に、リバイバル運動を支持し、コミュニティ参加者を増やしたが、カンバーランドの教職者と違って、中会主義を全ての点において拒絶した。(筆者訳) (イアハート・ブラウン博士による解説)

会は伝道師の資格を得る以前に3年間の神学の学びを必要とする総会の提案に対して、合衆国の辺境にある教会にはふさわしくないと反対した。その結果、1801年10月トランシルヴァニア中会は、マディー・リバー教会で、フィニス・ユーイング、アレキサンダー・アンダーソン、サミュエル・キング、エフレイム・マックリーンに奨励者(exhorter)、カテキズム教師(Catechizers)の資格を与えた。この資格は、1560年、スコットランド教会における第一回総会で採択された「訓練規定第一版」に定められていたが、正規の教育を受けた聖職者不足を補うための一時的規定であり、スコットランドの大学が説教者を輩出し始めると、1581年には廃止されてしまった。しかし、1800年代のリバイバル期の西部では近い状況があったため、奨励者等の活用が促された。また、スコットランドの前例に加えて、伝統的教育に欠けた者に資格を与えることは「中会主義教会の政治形態(the Form of Government of the Presbyterian Church)」に規定されている、「普通ではない場合(extraordinary case)」の一例とも解釈された。しかし、このように教職者不足を補うことに反対するトランシルヴァニア中会のメンバーは、署名入りの抗議書を大会に提出した。

カンバーランド中会の誕生

一週間後に開かれた、ケンタッキー大会は、トランシルヴァニア中会を、トランシルヴァニア中会とカンバーランド中会へと分離した。カンバーランド中会は当初、リバイバル賛成派と反対派の教職者が5人ずつで均衡を保っていたが、一人のリバイバル派の教職者がカンバーランド中会の正規の会員と認められリバイバル派が一人だけ多数派になった。それに伴って、次々とリバイバル派は有資格見習い(licensed probationer)、有資格奨励者(licensed exhorter)、教職志願者、教職者を増やしていき、分離後一年目の終わりにはカンバーランド中会の中で絶対的多数派となった。リバイバル派の勢いが増すなか、反リバイバル派は、大会全体がリバイバル派に支配されそうな状況に強い危機感を覚えた。リバイバル派はカンバーランド中会の中では絶対的多数派であったが、反リバイバル派は、トランシルヴァニア中会、ケンタッキー大会において多数派であったため、問題を大会に持ち込んだ。また、最初にケンタッキーに定住した中会主義教職者であるデヴィッド・ライス(David Rice)は、リバイバル当初は、信徒が奨励を行うことに賛成していたが、「福音伝道に見識がない者が公に奨励することの正当性」に不安を感じ、それに關して総会にアドヴァイスを求めた。1804年の総会は、奨励者のような役職は、一

時的に必要な場合は認められるが、最終的には正規の教育を受けるべきであることと判断し、委員会を大会に送った。

ケンタッキー大会内の分裂

大会がカンバーランド中会に対する姿勢には、カンバーランド中会のリバイバル派が「ニューライト」（または「ストーン派」）と呼ばれる異端グループに属しているという誤解も影響していた。カンバーランド中会の反リバイバル派教職者トーマス・クレイグヘッドとその仲間は、the common fame letter⁶を大会に送り、その中で、カンバーランド中会のリバイバル派がカンバーランドから200マイルも離れた場所で活動しているニューライトグループと同一のグループであるという偏見を大会メンバーたちに喧伝しようとした。

1804年の大会が開かれる2週間前の10月2日に、大会及びカンバーランド中会の反リバイバル派の動きに反して、カンバーランド中会のリバイバル派は、マックグレディを議長、ユーイングを書記として会議を開き5人の信徒に奨励者としての資格を与えた。大会は、カンバーランド中会で問題になっている件について、各中会に「我々の教会憲法に記されている規則と、その件に関する総会から送られて来たアドヴァイスの手紙」に従って中会運営がなされるように「命じた」。また、その件を調査し、次の大会で報告する5人の委員会メンバーを任命した。しかし、リバイバル派は、審議のための決定機関で判断される前に、大会が「命令」を下したことは大会の越権行為であると考えた。

1805年10月の大会においては、5人の委任委員会によって審査されたカンバーランド中会の議事録が「はなはだ不完全な記録」と判断され、10人の聖職者と6人の長老から成る commission が作られ、カンバーランド中会のメンバーと共に協議し結論を出すように命じられた。中会主義教会において秩序を保ち教義の安定を目的に教会を調査する大会委任委員会の設置は、前例がないわけではなかったが、正規に大会から権威を与えられた「委任委員会」の行使は前例がなく、カンバーランド中会のリバイバル派教職者はそのような委員会を違憲であると宣言した。それに対して12月に開かれた委任委員会では、カンバーランド中会リバイバル派の5人の按手を受けた教職者、6人の見習い (probationer)、15人の奨励者に対して活動禁止を命じた。活動禁止を受けた者たちのうち、按手を受けていた教職者

6 告発者が告発される者の名前を明示せず、「教会訓練」においては証拠とはみなされない噂に基づいたような書簡（イアハート・ブラウン博士による解説）。

は母教会で教職者としての地位を回復する可能性を模索しながら説教し、聖餐式を執行しようとした。その一方で大会との和解の努力は、妥協を拒む数名の教職者が1810年2月に独立した中会を組織するまで、彼ら自身で形成した「協議会 (the Council、後にカンバーランド長老教会に発展する組織)」を通して続けられた。

1706年から1810年までの中会主義教会の年表

1706年	フィラデルフィアに米国最初の中会を組織
1716年	フィラデルフィアに大会を組織
1718年	<u>ウィリアム・テネント</u> 、アイルランドから渡米
1721年	Old Side の <u>ジョージ・ギレスピー</u> が翌年の大会で『ウェストミンスター信仰告白』への全幅的同意を提案するための準備を大会に提出。
1722年	New Side の <u>ジョナサン・ディキンソン</u> がギレスピーの提案に対し大会内の分裂を防ぐための「 <u>4カ条</u> 」提案
1724年	Old Side のニューキャッスル中会が単独で『ウェストミンスター信仰告白』への全幅的同意を採択し、中会内で実行
1727年	ニューキャッスル中会のジョン・トンプソンが、大会においても全幅的同意を徹底するための「 <u>6カ条</u> 」を建議
1729年	大会の分裂を恐れる両派は「 <u>信条採用決議</u> 」を妥協策として採択
1732年	New Side のジョン・テネントによってリバイバルに火が付く
1736年	7人のOld Side からなる委員会が「 <u>信条採用決議</u> 」のリベラルなポリシーを廃止する議題を提出
1738年	ウィリアム・ジュニア、ギルバート・テネント、サミュエル・ブレア、ジョン・クロス、エレアザー・ウェイルズが <u>ニューブランズウィック中会</u> を立て上げ、リバイバル派に丸太小屋大学出身の教職志願者が按手札を受けることができるようになる <u>ニューヨーク中会設立</u>
1739年	<u>ホイットフィールド</u> が渡米しリバイバル運動を展開
1741年	Old Side は、ニューブランズウィック中会の聖職者とその仲間たちが7つの罪を犯しているという署名入りの抗議文を大会に送り New Side を批判
1745年	New Side による <u>ニューヨーク大会</u> がニュージャージーに設立され、

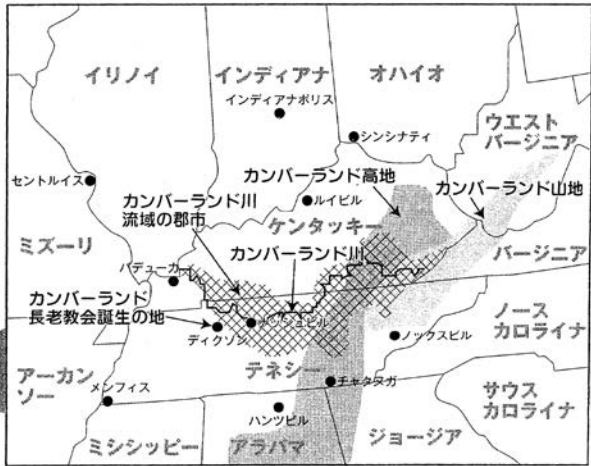
大会が分裂

- 1758 年 Old Side と New Side が再合同し、「ニューヨーク・フィラデルフィア大会」を組織
- 1788 年 総会を組織
- 1800 年 ケンタッキーのレッド・リバー教会でジェームス・マックグレディによる「1800年のリバイバル」、マックグレディの影響を受けたバートン・ストーンが東部ケンタッキーでリバイバル指導
- 1802 年 コネティカットのエール大学でティモシー・ドワイト (1752-1817) ⁷ が学長に就任後大リバイバル
- 1802 年 10月のケンタッキー大会は、トランシルヴァニア中会内でリバイバル派と反リバイバル派が対立していることを理由に、トランシルヴァニア中会をトランシルバニア中会とカンバーランド中会に分離
- 1803 年 カンバーランド中会においてリバイバル派教職者が過半数を超える
- 1804 年 カンバーランド中会は正規の教育を受けていないリバイバル派の教職者が増え続け、リバイバル派の台頭に危機感を持ったケンタッキー大会の要請により、総会からの委員会がケンタッキー大会に派遣される。一方、反リバイバル派のトマス・クレイグヘッドがカンバーランド中会のリバイバル派を中傷する手紙 (the common fame letter) を大会に提出。10月のケンタッキー大会はカンバーランド中会に委任委員会を派遣し、リバイバル派の教職者を調査することを決定
- 1805 年 10月のケンタッキー大会で委任委員会が、カンバーランド中会の中会議事録が「はなはだ不完全である」と報告。それによって16人による大会委任委員会設立
- 1805 年 12月、大会の委任委員会はカンバーランド中会リバイバル派教職者26人を活動禁止処分
- 1806 年 10月のケンタッキー大会は、カンバーランド中会を解散し、会員をトランシルヴァニア中会に移すことを決議
- 1810 年 2月、妥協しないリバイバル派の教職者がケンタッキー大会を離れ独立したカンバーランド中会を設立

7 ジョナサン・エドワードズの孫であり、理性重視の立場でリバイバルを促進した。ニューイングランドにおけるリバイバルの最も影響力のあるリーダーの一人。(著者訳) Noll, *A History of Christianity in the United States and Canada*, 159.

アメリカ

カンバーランド長老教会はテネシー州ディクソンで誕生した。カンバーランドの名称は、アパラチア山脈の南部に広がるカンバーランド山地、カンバーランド川流域一帯の地方に教会が増えていったことに由来する。



出典：カンバーランド長老キリスト教会日本中会『カンバーランド長老教会信仰告白』
(いのちのことは社マナブックス、2014年)

図1 カンバーランド長老教会関係地図

A People Called Cumberland Presbyterians 翻訳

第5章 解決されない違い：新しい教会

我々は4年以上空しく待った。総会に対して問題を是正し、我々の踏みにじられた権利を回復するように嘆願をしながら。しかし我々はこの、カンバーランド中会という名で知られる一つの中会を制定することに同意し、決断する。

サミュエル・マカドウ、フィニス・ユウイング、サミュエル・キング 1810年

リバイバル派の教職者協議会は、引き続き敗北に苦しみながら、一方で1806年から1810年の間、長老教会との和解を模索し続けていた。協議会の設立直後、ジェームス・マックグレディは、結果的に協議会メンバーの長老教会からの完全な分離しかありえないであろうと思い、協議会から脱退した。マックグレディはリバイバル派の教職者、そして長老教会に対しても¹中立の立場を取り続けた。彼はそれ以降、協議会の会議に出席できず、また1809年までトランシルヴァニア中会の会員にもなれなかった²。大会の委員会がカンバーランドの教職者たちを停職にした8ヶ月後、ケンタッキー大会の著名な教職者であるジェームス・ブライス (James Blythe) は、協議会の代表者のウィリアム・ホッジに手紙を書いた。

カンバーランド中会とケンタッキー大会の間に存在している相違は、平和的に解決されるだろうと、私は自負している。そうすることがすべての誠実なキリスト者、平和を愛する者の傾向であるべきだと思うからである。今、この手紙を書いている私の主な目的は、あなたに対してまたあなたを通してカンバ

1 James Smith, *History of the Christian Church from Its Origin to the Present Time, Compiled from Various Authors; Including a History of the Cumberland Church, Drawn from Authentic Documents* (Nashville: Cumberland Presbyterian Office, 1835), 614-16. 及び、Thomas Campbell, *Studies in Cumberland Presbyterian History* (Nashville: Cumberland Presbyterian Publishing House, 1944), 74 を参照。

2 1806年10月28日のケンタッキー大会の議事録によると、カンバーランド長老教会の会員は、ケンタッキー大会の委任委員会会議に続く、ケンタッキー大会の定例会議で、トランシルヴァニア中会に併合された。マックグレディは、後に、協議会メンバーはたとえ結果が長老教会からの完全分離を意味していたとしても、正しい経過に従っていたと認めた。

ーランド中会の親愛なる兄弟たちができるだけ多く、来たる大会に出席するように指示することである。あなたがたは、兄弟たちから暖かく歓迎されること、また神の言葉と、教会政治と両立する問題に関して調整する最大の努力がなされることを期待して良いのです。我々はもはや、お互いを疑うのをやめ、誠実な人間として、またキリストの弟子として、お互いを信頼しましょう。このような思いを持って、会うことができれば、すべての事が正しくなされるでしょう。我々はあなた方と会うことを望んでいますし、あなた方の平和と繁栄のためにあなた方と祈りを合わせることを望んでいます。³

協議会はホッジとジョン・ランキンに、和解の努力をするために1806年10月のケンタッキー大会に出席するように指示した。ホッジとランキンは共に、前年12月に、大会の委員会から異端的な教義を持っているとして糾弾されていた。彼らは、大会に対して大会の異端糾弾には従わないが、和解を達成するようにという協議会の指示には従って出席した。大会は協議会の代表と話し合うための委員会を制定した。短い会議の後で、二人は委員会に彼らの教義的正当性を確信させた。彼らは、人は恵みの種を持って生まれてくるという考えを否定した。彼らは選びの教義を信じていることを断言したが、選びの神秘を理解することはできない、と言うことによって彼らの主張を限定した⁴。委員会はホッジ、ランキン、そしてウィリアム・マクギーへの異端糾弾が誤りであったことを確信したが、ホッジとランキンに対して、カンバーランド中会が按手を施した、または資格を与えた者たちの審査のため彼らをケンタッキー大会へ引き渡すように求めた。ホッジとランキンはそれを拒否した。委員会がその決断を大会に報告すると、大会は即座にその二人の教職者が、「悔い改めと恭順を明らかにする」まで教職者の働きを停止することを宣言した。⁵ (ウィリアム・マクギーは、カンバーランド中会に参加する1810年までは、

3 ホッジへのブライスの手紙は、*A Pastoral Letter Addressed to the Churches under the Care of the Presbytery of West Tennessee* (Nashville: Eastin & Gwin, 1812), 9-10に含まれている。

4 長老教会の憲法は『ウェストミンスター信仰告白』3章8項において、「予定論の高度に神秘的な教理」として、それに言及している。

5 1806年10月27-28日のケンタッキー大会の議事録159-160頁には、それがコシット (Cossitt) とフィニス・ユーイングと記されている。B. W. McDonnold, *History of Cumberland Presbyterian Church* (Nashville: Board of Publication of Cumberland Presbyterian Church, 1888), 82. Campbell, *Studies in Cumberland Presbyterian History*, 74 も参照。

どちらの側につくことも拒否した)。その停職処分は、ケンタッキー大会が個々の聖職者に独自の裁判権を行使した2番目の事例となった⁶。休会前に大会が行った最後の決議は、カンバーランド中会を解散し、その会員をトランシルヴァニア中会に移すことであった。その理由は「彼らに教会の働きをできなくさせている特別な性質が、カンバーランド中会の中に存在している」というものであった⁷。

ブライスはケンタッキー大会の三ヶ月後の1807年1月に再びホッジに手紙を書いた。

あなたの地域での教会のはなはだ不幸な状況が、あなたに会って以来私の心を大いに占めています。私は、昨年の夏あなたに手紙を書いたこと、また大会にあなたの出席を望んだことに不純な動機があったのではと疑われていると聞いています。私はその時の動機は純粹であると自覚しているし、またあなたの友情、良識、経験を信頼しているので、私は再びあなたにもう一つの計画を提案するために手紙を書いています。それによって、最も不幸な意見の相違が解消され、教会の繁栄と平和が促進されることを強く望みます。私の計画というのは、あなた方と大会の両者が、次の総会で、委員会の派遣を嘆願するようにさせることです。その委員会は秋にレキシントンで開かれ、我々の相違をすべてその委員会に委ねるのです。もし委員会があなた方のすべての若い説教者に説教することを許すならば、大会はそれに黙って従うでしょう。もし委員会が、その説教者たちのさらなる審理が適切だと考えるならば、委員会はその審理をする者を指名するでしょう。親愛なる兄弟、この件をよく考えてください。私は、大会の指導的メンバーは、不和の状態であるよりもむしろ、あなたにその説教者たちを喜んで与えると思います。しかし彼らが説教者たちの資格を判断する権利をあきらめることはありません。それでも彼らはその判断を総会の委員会の手喜んで委ねるでしょう。もしこの場所で総会の委員会に面会することをあなたが正しいと思うならば（それを私は真摯に願うが）、ここにいる我々数人はフィラデルフィアに手紙を書きましょう。私はそのよう

6 Smith は長老教会の総会書記からの手紙を引用している。「健全な長老教会員の誰の心にも疑いは今もあり得ない。しかし前述された聖職者（ホッジとランキン）の活動停止処分は全く憲法に反しているし、無効とされるべきである」。Smith, *History of the Christian Church*, 616-17.

7 1806年10月28日、ケンタッキー大会の議事録参照。

な約束を取り付けることができると信じています。私はそうなることを切望しています。あなたが速やかにあなたの兄弟たちと相談し、我々の間にある不和を取り除くためにこの提案または他の提案を受け入れることを望みます。あなたは間もなく総会の時が来ることを心にとめる必要があります。⁸

協議会はブリスの忠告に従い、「1807年総会に対するリバイバル教職者の手紙」を通して論争をもたらした⁹。その書面は協議会を代表して、サミュエル・マカドウ、ウィリアム・ホッジ、ジョン・ランキン、ウィリアム・マクギーによって書かれ、署名されていた。その書面は1800年のリバイバルから1806年の協議会設立までの出来事を概観していた。それはリバイバルの広がりに伴って、正規の教職者が説教を求めている教会に派遣されなかったこと、カンバーランド中会はその無牧の教会の必要を満たすために奨励者に資格を与えたことを説明していた。中会は奨励者に正規の教職者としての資格を与えるつもりはなかったが、もし奨励者の中で「良い成績を獲得するものがあるならば、聖なる職務のために区別されるであろう」こと¹⁰、また、ある者は長い試験期間のあと、中会が彼らの資格を要求する署名入りの嘆願書を受け取った後に説教する資格が与えられたことが述べられていた¹¹。また、その書面はそのような方法を取ったことに対する弁明が述べられていた。

我々が彼らに資格を与えたのは、彼らが良き賜物を持っていることを個人的に知っていたためであり、……多くの一般信徒から温かい嘆願がよせられたためであり、多くの中会にもそのような例があるからであり、学問上の資格に関して聖書が沈黙しているからであり、ライス氏の手紙への返答の中で「そのような人間的な学問は牧会に必須のものではない」と我々が宣言したからであり、また、このことが「訓練規定」の中に示されている例外に当たるからである。故に、彼らに資格を与えたことは、神の法にも我々の教会の法にも違反していないと謙虚に考えた。

8 *A Pastoral Letter...of the Presbytery of West Tennessee*, 10より引用。

9 1789年から1802年の総会議事録、378、384頁参照。

10 1804年のデヴィッド・ライスの手紙に対する総会の返信のなかで彼らはこれに同意していた。1789年から1820年の総会議事録、299-301頁参照。

11 1802年8月8日トランシルヴァニア中会議事録、1802年から1806年までのカンバーランド中会議事録中の1803年10月7日、1805年4月3日、1805年10月2日参照。

協議会は、新しい派の設立に関して、究極的な必要性がないならば、それを望んではないと言った。また、教義的異端に関しては、彼らへの糾弾を否定し、聖書の教義としての「選び」を信じているが、それはあまりに「神秘的な事」であるので、理解することはできないと主張した。恵みに関してペラギウス主義的考え（Pelagianism）を持っているという糾弾に対して、協議会は「我々は人間が恵みの種を持って生まれてくるということを完全に否定する」と返答した。リバイバル派の教職者への疑いの論拠は、大会の委任委員会の権威に従わなかったことであると、その書面で断言した¹²。

リバイバル派の教職者の件は、ケンタッキー大会からの訴えが総会までに提出されなかったので、総会は公式な決断をすることを拒否した。総会は2通の手紙を出した。一つは協議会宛てであり、もう一つはケンタッキー大会宛てであった。協議会宛ての手紙は、カンバーランド中会が「訓練規定」で要求されている資格を持っていない者たちに按手を施したことを非難していた。総会は、協議会のメンバーに「基準（the Standards）」に従って事を成すようにと忠告していた。またケンタッキー大会への手紙は、大会の熱心さを賞賛はするが、若い説教者たちを再審理することに大会が固執することには疑問を呈していた¹³。また、総会は正式なプロセスを経ずに、不正規に按手を受けた教職者たちを停職にし、また再審理に同意しなかったホッジとランキンをも停職にしたことを疑問視した。総会は大会に対して、その処置を再考し、また「それらのうちのいくつかを取り下げる必要があるかを考え、あなたの方の非難が生み出したこの難局を少しでも和らげ、またその非難に対して起こった反発を少しでも取り除く手立てを早急に取るように」と忠告した¹⁴。

12 この手紙の完全文は Smith, *History of the Christian Church*, 617-25 を参照。

13 以下の注釈が総会によって大会議事録に付け加えられた。「ここまでは精査し、承認され、3の不適切かつ曖昧な点は異議が唱えられた。また少なくとも裁判の対象になりそうなカンバーランド中会に関する処分、もしくは少なくとも疑わしい手続きの正当性を除いて同意する。1807年5月フィラデルフィア総会において。アーチボルド・I・アレクサンダー（Archibald I. Alexander）、議長」。

14 1789年から1820年までの総会議事録、389頁から393頁。Robert Davidson, *History of the Presbyterian Church in the State of Kentucky with a Preliminary Sketch of the Churches in the Valley of Virginia* (Lexington: Charles Marshall, 1847), 376、及び E. B. Crisman, *Origin and Doctrines of the Cumberland Presbyterian Church* (Nashville: Cumberland Presbyterian Publishing House, 1856), 36-41、及び George B. Hays, *Presbyterians: A Popular Narrative of Their Origin, Progress, Doctrines, and Achievements* (New York: J. A. Hill & Co., 1892), 463。及び、Ezra H. Gillett, *History*

このように、1807年度総会の態度は、総会理事からの手紙によって示されている。手紙は協議会に対して、いかなる大会も上訴司法権（appellate jurisdiction）による以外の方法で、教職者を訴える権利はないこと、つまり、中会のみが、教職者の教義と慣行に対する誤りを説明するために中会メンバーを集めることができることを説明していた。それはたとえ中会が必要な資格を求めずに不適切に按手を行ったとしても、いったん中会がある人物に按手を施したら、按手の後、起きているまたは明らかになった訴訟事件を除いて、中会といえどもその人物を処分することは出来ないことに同意していた。またその手紙は、カンバーランド中会を解散し、そのメンバーをトランシルヴァニア中会に移したことは、正しかったが、「按手を受けた教職者を停職にしたことは全く正しくなかった、そしてさらに不適切であったのは、大会委員会がそれを行ったことだった」と述べていた¹⁵。

この手紙を受けて、ケンタッキー大会は1807年の定期会議で、総会による訓戒と批判について討議したが、カンバーランド中会に関する以前の審議を多数決によって支持した。それで大会はカンバーランド中会に関わる全ての問題を解決するためにトランシルヴァニア中会に移管した。これにより協議会は以前彼らに審判を下した機関よりも下位の司法機関と交渉しなければならなくなった。協議会メンバーは自分たちがやりにくい立場に立たされたことに気付いた。彼らは総会に彼らの訴訟を持ち出す前に、教職者に停職の処分を下した機関よりも下位機関であるトランシルヴァニア中会と交渉しなければならないのである。つまり彼らを糾弾した同じ機関である、ケンタッキー大会に対して上訴し、総会に対して正規の上訴をするために、再びトランシルヴァニア中会の裁判にかけられなければならなくなった。大会が、リバイバル派の教職者を再審査に従わせる目的で、協議会をトランシルヴァニア中会に任せたのは至極当然である。協議会は袋小路に入ってしまった。なぜなら総会は彼らが正規の上訴をするまでは、彼らのために決断を下すわけにはいかな

of the Presbyterian Church in the United States of America II. Rev. ed. (Philadelphia: Board of Publication and Sabbath-School Work, 1873), 186-87. 及び Walter Brownlow Posey, *The Presbyterian Church in the Old Southwest 1778-1838* (Richmond: John Knox Press, 1952), 34-36 を参照。

- 15 その理事はフィニス・ユーイングによって、フィラデルフィアのジャクソン氏であると明らかにされている。その理事の手紙は、「西テネシー中会の牧会的書簡に対する返信を含む一連の手紙：それに、カンバーランド中会の監督下の会衆に宛てた手紙も加えられたもの」の中に再録されている。タイプされた原稿はノースカロライナにある長老教会及び改革派教会財団に保管。

かったからだ。そのため協議会は、再び1808年の総会に彼らの特殊な状況に何らかの救済命令を出してもらうよう請願した。総会は再び、その件はケンタッキー大会からの上訴が取り上げられない限り、なんの救済命令も出すわけにはいかず、停職の撤回にふさわしい唯一の決定機関であるケンタッキー大会に請願者を差し向けなければならないと返答した¹⁶。総会の休会后、フィラデルフィアにあるファーストプレスビテリアンチャーチの牧師であるジェームス・P・ウィルソンがウィリアム・ホッジに手紙を書いた。

主にあり尊敬し敬愛する兄弟。今年私が総会に出席していたのは、主にあなた方の訴訟のためでありました。私たちの多くはあなたとあなたの兄弟たちがこの厄介な状況から救済されるように案じております。総会の大多数が、公正で正当であり、もしくはあなたがたが賢明に望んできたこと全てを有利に進めることを望んでいます。もしケンタッキー大会の記録が私たちの前にあるのならば、簡単にあなた方の停職処分を覆すでしょう。しかし私たちにケンタッキー大会からの連絡はなく、欠席している彼らに口出することは出来ませんでした。しかしこれは必ずしもあなた方に不利に作用するわけではありません。なぜならば、もし委任委員会の働きに法的権威がなく全く無効なものならば、またこれはさらに良い見解ですが、もし中会の解散の前になされた按手が合法的権威によるものならば、あなた方は真に教職にあるものののです（中会はないとしても）。私はあなた方に……もう少しこのまま続けることを願います。私たちは、あなた方の問題が次の総会で決着がつくであろうと信じるあらゆる理由を持っているのです。……私たちはあなた方が認めた兄弟たちの分別、勤勉さ、成功についての評判を耳にして喜んでいます。もし彼らが健全な言葉を保持し、信仰に固く立つならば、あたかも彼らが長く勉強し大学を卒業したのと同じように、私たちすべてに等しく愛されるでしょう。しかし、将来において、資格に関する私たちの基準は、教会がより安定するために固守されるべきです。……そして教職志願者は、……福音の狡猾な敵たちに対処するために、より適切に資格が与えられるべきでしょう。¹⁷

16 1789年から1820年の総会議事録の406、408-409頁、及び John Vant Stephens, *Genesis of the Cumberland Presbyterian Church* (Cincinnati: privately printed, 1941), 67を参照。

17 ウィルソンの手紙は、Smith, *History of the Christian Church*, 62に再録。

総会が、ケンタッキー大会の議事録が総会に送られなかった故に、協議会に対して好意的な決断を下すことができなかったことはかなりの運命の皮肉である。その同じ大会が、議事録を大会に提出しなかったという不法な手続きでカンバーランド中会の教職者を糾弾したのだから¹⁸。この行為の欠如が、それが故意であろうとなかろうと、論争が少なくともまた一年間解決されることを妨げてしまった。もしケンタッキー大会の議事録が1808年の総会に提出さえしていたなら、その論争は解決されたであろうしカンバーランド長老教会は決して誕生しなかったであろう。単純なミスであったことが、アメリカの中会主義の方向を全く変えてしまったのだ。

今や、元カンバーランド中会の頑固なメンバーと対応する責任を担っているトランシルヴァニア中会は、1808年10月に集まり協議会メンバーに以下のような手紙を起草した。

親愛なる兄弟たち。私たちはあなたたちに会い、その訴訟の中に存在している困難さに関してあなたたちと友好的な面談の時を持つことを切望しています。ケンタッキー大会はあなたたちに関して彼らに課せられた要件を解決する努力をするように私たちに指示してきました。あなた方が、3月22日水曜日に私たちと会ってくださること、そして大会委任委員会に福音を語る資格がないと宣告され、あなたがたが参加するのが正当と思われるできるだけ多くの者たちをも連れてきていただいて、友好的な面談を行いたいのです。¹⁹

ホッジが協議会を代表して会議に出席した。トランシルヴァニア中会は、ホッジに対し、彼と協議会の他のメンバーに対する罪を決定する大会の全権を持っていることを伝えた。このような力の行使はあらゆる中会主義的信条と慣行に反するものだった。下位機関が上位機関の全権を与えられるということはありえないことだった。トランシルヴァニア中会は、彼らの書面による決定事項を協議会に渡すようにホッジに託した。

親愛なる皆様。ご依頼通りに、中会はあなた方に書面で、また、同様にあなた方に関心のあるあらゆる人たちを通して語ることが正当であると考えました。……私たちは、前回の会議で明らかにされた同じ友好的な精神を持って、……

18 ケンタッキー大会 1803年9月8日、及び1804年10月17日議事録参照。

19 1808年10月7日トランシルヴァニア中会議事録参照。

続いて和解のための条件を宣べます。私たちは、大会によるあなた方の活動停止の根拠は正しく、また結果的にその処分の理由も正しく、正当であると考えます。このような考えをもっていますので、私たちはあなた方の復職は、信仰の正当な認識、及びあなた方も従っている「訓練規定」に含まれる私たちの教会の権威への服従、によってのみ達成されると考えます。また、大会委任委員会によって行使された大会の権威に従わなかった故に未だ出廷通告中にある兄弟たちも同じことが要求されます。……これにより、私たちの信仰告白の明白な受託も不可欠なことが容易に推測されます。²⁰

協議会はその条件を拒絶した。なぜならば、彼らは実際その件は次の総会で解決されるであろうと確信していたからだ。トランシルヴァニア中会は、ランキンをシェーカーとのつながり故に処分し、またマックグレディ、マッカドー、マックギーを次の会議に出廷するように召喚した。

1809年の総会は、トランシルヴァニア中会の会議のちょうど3ヶ月後に開かれる予定だった。正規の手続きはトランシルヴァニア中会の決議を10月に開かれる次の大会会議に提案することを要求しているので、協議会の上訴は1810年まで、総会に取り上げられることは不可能だった。協議会自身はウィルソンの手紙によって、彼らの件が1809年の総会で解決されると確信していた。このような考えがあったので、協議会はホッジに1809年の総会に手紙を書くように命じた。ケンタッキー大会はリバイバル派の聖職者たちとの問題を記している2通の手紙を総会に送った。1通は、前年度総会に送られたものだったが、なんらかの理由で総会まで届かなかったものと推測される。総会は2通の説明書が添付されている大会議事録を調査した。ケンタッキー出身のジョン・ライルはケンタッキー大会を弁護するため出廷したが、彼は1805年、委任委員会の会議で聖職者の資格について3時間説教をした人物である。彼の説教は、委任委員会で大きな影響を与えたが、総会においても同様に効果的だった。彼は委任委員会と大会の決断を支持する弁明をする時に泣いた。ロバート・デーヴィッドソン (Robert Davidson) でさえも、ライルが「真理と秩序の友の不名誉と挫折の結果を鮮やかに説明しながら、はばかりずに泣いた」時、総会は大会を支持するように大いに影響を受けたことを認めた²¹。

20 1809年3月25日トランシルヴァニア中会議事録、及びCrisman, *Origin and Doctrines of the Cumberland Presbyterian Church*, 66-67を参照。

21 Davidson, *Presbyterian Church in Kentucky*, 119, 250.

総会は大会を支持して決断を下した。

総会はケンタッキー大会からの手紙を考慮に入れ、また昨年偶然総会に届かなかった彼らの記録からのもう一通の手紙も読んだうえで、次のような意見に至った。ケンタッキー大会は、礼儀正しくまた法的に正しい、またこの総会をも十分満足させる彼らの処分を説明する疑いのない権利を持っている。そして、彼らが置かれていた困難な状況において彼らが取った断固とした態度と熱心さは教会からの感謝に値すると彼らに言うことは当然だと考える。²²

総会は、カンバーランドリバイバル派が総会に手紙を送った時、公式な行動を取ることを2回拒絶したが、ケンタッキー大会から送られた2通の説明の手紙に基づいて決断を下した。1809年9月、フィラデルフィアのファーストプレスビテリアンチャーチの長老であるジョン・コネリー (John Connelly) は、協議会の連絡係であるホッジに手紙を書いた。

親愛なる方々、

ファーストプレスビテリアンチャーチから信徒代表として今年度の総会に出席し、貴中会に関する要件とケンタッキー大会の要求に対して総会で下された命令を知りました。また、先月9日付の貴中会の手紙が送られていた紳士たちは、今年度の総会メンバーではありませんでしたが、その手紙を私が読むことを喜んで許可してくれ、私はその内容を熟考しました。それ故、下記の手紙をあなたに送ることが私の義務であると考えました。どうか「シオンの平和への愛」を命じる霊を持って受け取ってくださいように。

先の総会において、今は消滅したカンバーランド中会からは何の報告もありませんでしたが、ケンタッキー大会からの代表は、認可を得て大会に貴兄たちの件を持ち出しました。印刷物の抜粋から次のことが明らかです。第一に、前回の総会の要求にあなた方が従わなかったし、これからも決して従わないであろうということ。第二に、ケンタッキー大会の力を弱めることによって教会的利益に損害を被るということ。そして最後に、委任委員の一人（ジョン・ライル）の強力な雄弁さ（頬から流れ落ちる涙を伴う）から、聴衆も同情の涙

22 1789年から1820年の総会議事録、416頁及び、Stephens, *Genesis of the Cumberland Presbyterian Church*, 69を参照。

を流し、彼の情熱に拍車がかかり、すべての反対者を沈黙させたことである（しかし全ての反対者が納得させられたわけではない）。しかし、もし総会が、先月9日の貴兄の手紙に含まれていた情報を得ていたならば、総会がその件に注目し、あなた方は今年の総会の命令に従い、あなた方に正義がなされていたであろうことを私は確信しています。

さて、質問ですが、あなた方はどのようなことをめざしていますか？あなたがたが、「もし総会が私たちの件に関してまだ決断を下していないのならば、もし私たちが救済策などの希望を持って上訴の手続きを進めるとあなた方が思っているならば」と言うのなら、これに対して、私は、あなた方はまだ裁判にかけられていないし—あなた方の件は大会の代表の全力で根気強い聴聞会での発言はあっても、あなた方は不在で、あなた方側の情報もない中で、決断を下されたように見えるかもしれないが—もしあなたが1808年の総会からの手紙を初めて受け取った時から、真摯にその命令に従うつもりがあって、返信の遅れに対する理にかなった言い訳があるのならば、私が見る限り、あなたたちの現在の状況は全く変わるだろうと答えます。この件に関してあなた方は判断することができます。前総会の命令に従うことに関して、もし私があなたの立場であつたら、私が以前から大会の指示に従う意思を持っていたのならば、以前の命令通りに大会に従います。しかし今までそれを拒絶し続けてきたのなら、今そうすることは遅すぎると考えます。

あなた方が独立した中会を設立することに関しては、私だったら避けるでしょう。私が見る限り、他の全ての教派と明確に違う中会主義の中にいるあなたが、独立して教義の健全さと秩序と訓練の厳しさを維持することは、不可能とまでは言わないまでも、おぼつかないことです。増殖していく分裂によってキリストの運動を傷つけるよりも、私だったら何があっても少しずつ教会の懐に戻ってくることを選ぶでしょう。

あなたの友であり、キリストの教会にある平和と秩序の友より

ジョン・コネリー²³

協議会のメンバーは、今や3年半も彼らの苦境の救済を待っていた。総会が大会を支持して、彼らに反する決議をした時、協議会は1809年秋、会議を開き大会と

23 A Pastoral Letter ... of the Presbytery of West Tennessee, 7-8からの引用。

交渉する2人の委員を指名した。協議会は、大会、トランシルヴァニア中会、または委員会に、個人個人としてではなく、協議会という団体として審査されることで合意した。さらに、協議会は宿命論(fatalism)だけを例外として、信仰告白を受け入れることに同意した。ウィリアム・ホッジとトマス・ネルソンはこの条件をケンタッキー大会に提示するため委任を受けた。レキシントンで開かれるケンタッキー大会の1週間前、ホッジはトランシルヴァニア中会に出廷し、ホッジ自身の件はケンタッキー大会に委ねられるように求めた。ホッジはそれから和解の条件を大会に提示した。大会はその条件を却下し、協議会のメンバー全員が審査されること、またメンバー全員が無条件で信仰告白を受け入れるという真逆の提案をしてきた。ウィリアム・ホッジはこのことを協議会に報告することに同意し、また自分を長老教会に復帰させてくれるように嘆願した。サミュエル・ホッジとトマス・ネルソンからの嘆願も受け入れられた。大会はその嘆願をトランシルヴァニア中会に委ね、その嘆願を採決するために12月に会議を開くように命じた。

ウィリアム・ホッジは10月24日協議会に対して、大会が彼らの条件に応じたと報告した。長老教会と合意に達したいというホッジの願いは何も述べず、またホッジ以外誰も知らないコネリーからの手紙のことも知らせなかった。協議会は大会の手紙を読み、大会が協議会の条件に全く応じていなかったの、即座に和解の条件を拒絶する投票を行った。次に最後の協議会の決議を実行に移すか否かに関しての投票が行われた(それは、もし大会が彼らの提案に同意しないならば、この日をもって中会を設立することを厳かに宣言するものだった)。それは大多数によって賛成された。その後、教職者であるウィリアムとサミュエル・ホッジ、長老のトマス・ドナルドが協議会から脱退し、トランシルヴァニア中会に入りたい意思を表明した²⁴。

ウィリアム・ホッジとサミュエル・ホッジはトマス・ネルソンと共に、12月、トランシルヴァニア中会と面談した。トランシルヴァニア中会は彼らを受け入れ、彼らは大会の権威に服従し信仰告白を無条件で受け入れた。ホッジとネルソンが協議会を脱退したため、協議会に残った按手を受けた教職者は、ウィリアム・マクギー、フィニス・ユース、そしてサミュエル・キングだけになった。サミュエル・マックドローはテネシーのデイクソン郡に移っていた。ジェームス・マックグレディ

24 *Circular Letter*, 12. 及び Robert Donnell, *Thoughts on Various Subjects* (Louisville: Cumberland Presbyterian Board of Publication, 1856), 233. 及び, McDonnold, *History of Cumberland Presbyterian Church*, 84 を参照。

はこの協議会のちょうど3週間前に、トランシルヴァニア中会の示す条件に合意してしまった。三人の残った按手を受けた教職者のうち、マックギーは、独立した中会を設立するか長老教会に戻るか決断できずにいたので、独立した中会を設立するのを妨げていた。協議会は、独立した中会にするために必要な3人の按手を受けた教職者のいない状態が続き、新しい中会を作ろうと考える教職者は、ユーイングとキングだけになってしまった。協議会の他のメンバーは、長老教会に残りたかった。ユーイングはメソジスト教会との合同の提案も拒絶した²⁵。

協議会メンバーは皆、委員会 (Committee) メンバーとなり、これからの方針の議論に入った。彼らは、按手を受けた教職者、教職候補者 (licentiate)、長老、そして代表者であり、それぞれ、次にリッジ教会 (Ridge meetinghouse) で会う3月第三木曜日まで、一致し続けるべきことで同意した。そのときまでに三人の按手を受けた教職者が中会を設立しないならば、彼らは、一致の絆から解放されることになった。

ユーイングは家に戻り、説教や聖餐式を執り行う按手を受けた教職者が十分にいない教会について悩んだ。ユーイングは、彼とサミュエル・キング2人だけで中会を設立することも考えた。ユーイングは戸惑い、マックギーかマッカドーが主導権を取ってくれることを望んだ。ついに12月6日、彼は主導権を取り、委員会のメンバーであり教職候補者のジェームス・ポーター (James Porter) にアドバイスを求める手紙を書いた。

親愛なる兄弟、私は頭が痛い。しかし、私はもはやあなたに手紙を書くことを延期したくはない。私は、テネシーのあなたの地方で、教会の状況に関して兄弟たちがどのように影響を受けているのかを聞きたい。私は、リビングストン地方を訪問したところだが、そこの兄弟たちは今まで以上に強いきずな

25 Peter Cartwright はいつもながらの大げさな表現で次のように述べている。「リバイバル派はメソジストに参加したいと試みたが、その提案はメソジストに拒否された。1810年10月、新しいカンバーランド長老教会は二つの教会の『協力に関する同意』についてメソジスト協会 (Methodist Society) に手紙を送った。メソジストは『聖礼典の合同 (Sacramental union)』に同意した。Peter Cartwright, *Autobiography of Peter Cartwright, the Backwoods Preacher*, ed. W. P. Strickland (New York: Calton & Porter, 1857), 47 及び “Minutes of the Cumberland Presbytery, 1810-13,” Reprinted in *Theological Medium*, IX (April and October 1878), 209-24, 480-98、及び同書の X (January 1879), 90-96 及び 1810年10月25日、及び1811年3月19日を参照。

で我々の委員会に結ばれているように思われたことを報告する。ケーシーズクリーク (Casey's creek)、スプリングクリーク、レバノン、マッカドーとその会衆たちともそうである。そして不思議な話したが、ギヤスパ・リバー教会は、全員一致で彼らの説教者の行為に反対し、全員が「委員会」に賛意を表明している。ネルソン氏の教会の一つ、また他の一部も、もし彼がケンタッキー大会に参加するならば、彼を辞めさせるだろう。故に、全体として、ケンタッキーのこちら側には、我々「委員会」から離れるように説得される家族は、9、10 以上もないだろう。

私はといえば、この問題を考えれば考えるほど、私の進むべき道が明らかになり、「束縛のくびきには二度と繋がれない」という決意が固くなる。それ故に、もしあとたった一人の按手を受けた説教者が私に協力してくれるならば、私個人としては、法的な形式が与えられた状態を作り出す決心である。あなたはおそらくこのことに驚くだろう。私も、この件を最初に考えた時は、そうだった。しかしその方法を深く、公平に考えてみると、誇りと伝統がそれに対する最も手ごわい理由だと信じるに至った。……この件に関する中会主義の原則は良いものであると思う。それ故に、究極の必要性がない限りそこから離れることには同意しなかっただろう。マックギー氏やマッカドー氏から意見を聞いていないので、私たちがそうする必要があるのかどうか、私にもわからない。ポーター兄弟、もしあなたがぶしつけと思わないならば、唯一按手を受けた二人の教職者から按手を受けることがあなたの誇りと良心を傷つけないかどうかと質問したい²⁶。

ポーターからユーイングへの返事は知られていない。おそらく、ポーターはユーイングに待つように説得したのだろう。2ヶ月待った後、ユーイングはそれ以上留まらなかった。要求されている3人の按手を受けている教職者なしで中会を設立するという過激な方法を取る前に、ユーイングとキングは教職者候補でユーイングの義弟であるエフライム・マックリーンに相談し、テネシーのデイクソン郡に行って、マッカドーに独立した中会を作る手伝いをするよう共に説得してくれるように頼んだ。マックリーンは保険として連れていかれた。もしマッカドーが中会設立を拒否したら、ユーイングとキングはマックリーンと設立するつもりだった。翌朝の2月

26 1809年12月6日、フィニス・ユーイングからジェームス・ポーターへの手紙。Cossitt, *Finis Ewing*, 191-92からの引用。

3日、彼らはマッカドーの所に向かい、夕暮れ前にそこに到着した。マッカドーはかなりの時間祈りを捧げた後、新しい中会を設立することに同意した。1810年2月4日、中会が設立され、カンバーランドと名付けられた。

テネシー州ディクソン郡、サミュエル・マッカドー牧師宅にて、1810年2月4日

長老教会で正式に按手を受けた教職者である我々、サミュエル・マッカドー、フィニス・ユーイング、サミュエル・キングは、不道徳また異端の罪が、いかなる教会会議でも提示されたことはない。空しく4年以上も待たされ、総会に苦情の救済策と、侵害された権利の回復を嘆願し続けてきたが、今ここに、カンバーランドという名前で知られる中会を設立することを決断し、同意した。今後、この中会で按手を受けるであろうすべての教職者候補、見習いは長老派教会の信仰告白、訓練規定を受け入れるように求められる。しかし、宿命論という考えは例外であり、これは予定論という神秘的な教理の下で教えられるべきものと思われる。しかしながら、一つの例外を除いた信仰告白を明確に受け入れることができる者は他に何も求められることはない。さらに、按手を受けて全職務を果たすようになる前に、すべての教職者候補は、英語文法、地理、天文学、自然または道徳哲学そして教会史の試験を受けることを求められる。また、上記の学問分野のすべて、もしくは一部の試験を、適切と思われるならば、伝道師資格が与えられる前に求められるかもしれない²⁷。

前年の10月に委員会が設立された時の、協議会の同意に従って、1810年3月、リッジ教会で会議が開かれた。その時に按手を受けていた教職者は、サミュエル・マッカドー²⁸、フィニス・ユーイング、サミュエル・キング、そしてエフレイム・マックリーンだった。有資格説教師はジェームス・ポーター、ヒュー・カークパトリック (Hugh Kirkpatrick)、ロバート・ベル (Robert Bell)、デビッド・フォスター (David Foster)、そしてジェームス・ファー (James Farr) だった。教職者候補は、トマス・カルホーン (Thomas Calhoun)、アレクサンダー・チャッ

27 この盟約は *Circular Letter* 中にある。

28 マッカドーは新しい教会の中では決して積極的な役割を果たさなかった。彼の家でカンバーランド中会が設立された後も、2回しか会議に参加しなかった。彼は決してカンバーランド大会のメンバーにはならなかった。Richard Beard, *Brief Biographical Sketches of Some of the Early Ministers of the Cumberland Presbyterian Churches*, second series (Nashville: Cumberland Presbyterian Board of Publication, 1874), 7-26.

ブマン (Alexander Chapman)、ウィリアム・ハリス (William Harris)、ロバート・ドネル (Robert Donnell)、ウィリアム・バーネット (William Barnett)、そしてデビット・マックリン (David McLin) だった。ウィリアム・マックギーは1810年10月に中会に参加した。これらの16人の男性がカンバーランド長老教会の設立者と言われている²⁹。

独立した中会の目的は、反逆でも分裂でもなかった。それは、いまだに進行中だったリバイバルによって生み出された緊急の必要を満たすためであり、また、説教し、聖餐式を執行する教職者に正当な権威を与えることであった。その目的は新しい教派を表明するものではなかった。3月に開かれた会議で、新しい中会のメンバーはなお長老教会との和解を表明していたが、10月までに和解が成立しなければそれ以上努力はしないことで同意した。最初の会議を一時休止する前に、新しい中会はその基準として、宿命論の考えだけを例外として『ウェストミンスター信仰告白』を採択した。また制限なく『ウェストミンスター信仰告白』を受け入れることができる人はそうすることが許された。しかし、予定論の宿命論を例外にしたい人のためにも条項が作られた。正式な大学教育及び神学校教育が命じられたが、必ずしも要求はされなかった。しかし、すべての教職者候補は英語文法、地理、天文学、自然そして道德哲学、教会史、神学、そして、経験的宗教の試験が課せられた。中会は、「この中には、前カンバーランド中会とケンタッキー大会間にあった相違の始まり、経過、結果に関する正式な声明がある。1810年」³⁰と記された巡回書簡を起草し、「新カンバーランド中会の協議会の保護下にある教会や兄弟たちへ」送ることを命じた。長老教会との和解の努力は1813年まで続けられた。1811年春、西テネシー中会はジェームス・W・ステイブンソン (James W. Stephenson) に「新カンバーランド中会会員と称する者たちに、私たち中会がどのように振る舞うことが賢明な事であるかに関して」総会からのアドバイスを求めるように命じた。西テネシー中会はまた、ギデオン・ブラックバーン (Gideon Blackburn) と、ダンカン・

29 創立者たち（ファアを除く）の短い伝記は Beard, *Brief Biographical Sketches* 及び *Brief Biographical Sketches*, second series に記されている。

30 1810年から1813年までのカンバーランド中会議事録の1810年3月20-22日。書簡IIに含まれる西テネシー中会へのユーイングの返事。John M. Gaut, *Patriotism and Presbyterianism: An Address before the Lebanon, Tennessee Bible Conference* (Nashville: Cumberland Press, 1908), 40-41, Davidson, *Presbyterian Church in Kentucky*, 253.

ブラウン (Duncan Brown) に、和解成立のため「新カンバーランド中会」と連絡を取る委員になるように命じた³¹。

総会は西テネシー中会のスティーブンスンに、「問題の教職者たちは、基準を固守しなければならない。なぜならば、平和のために表明された基準を放棄することは、あまりにも大きな犠牲を払うことになるからである」と記した返事を送って来た。そして、総会はスティーブンスンを鼓舞した。

それゆえ、あなたは信仰告白と訓練規定という基盤に固く立ちなさい。その基盤を守りなさい。もし彼らが私たちの教会に参加したいならば、彼らはその条件を知っています。³²

カンバーランドの教職者たちと連絡を取るように任命された委員会は1811年9月に、自分たちは十分にその職務を果たしたが、カンバーランド中会からは何の返事もなかったと報告した。恐らく、カンバーランドの教職者は、彼らに送られて来た手紙の趣旨の故に多少ためらったのであろう。手紙の著者たちはカンバーランド中会のメンバーを、会衆を引き抜き、「迷っている者たちを誤った方向に導くために」「中会主義者」という名前を使う目的で、分離した教会を組織したとして糾弾していた。彼らは次のように続けた。

我々の教会の教義と「訓練規定」があなたがたが他の教会を作るほどに不快なものならば、なぜ「中会主義者」という名前に留まり、我々と交わることをいまだに望んでいるのですか？……宣教の業が、弱く不十分な者に委ねられるべきだと思いますか？……教会、または国家の仕事のために人に資格を与える専門的な学びの有効性を否定する者たちは正気のさたではない。つまり生活の些末なできごとには目を閉じ、啓蒙主義の原理を打ち砕くことに力を使いなさい。……なされた懲戒処分も……教職者と信徒が、無知と熱狂主義の渦の中に共に落ち込んでしまうのを避けるのにほとんど十分ではなかった。

31 1810年から1863年までの西テネシー中会の議事録参照。写本記録は、Historical Foundation of the Presbyterian and Reformed Churches, Montreat, North Carolinaに。

32 スティーブンスンへの手紙は1811年5月11日の西テネシー中会の議事録に含まれている。また1789年から1820年の総会議事録473頁も参照。

手紙は、カンバーランドの聖職者たちが、宿命論が信仰告白の中で教えられていると信じている誤りに関する詳細な説明で終わっていた³³。

一ヶ月後、カンバーランド中会は、西テネシー中会とミューレンバーグ(Muhlenberg)中会と会うことに同意した。ユーイングとマックギーは、西テネシー中会に対して、カンバーランドのメンバーは「個人としてではなく、団体として調停される」ことを要求する手紙を書いた。個人としてではなく中会として審議されるという要求はニューサイドの伝統を持つカンバーランドの聖職者にとって重要な問題だった。個人として審査されるということは、大会が個人の聖職者の本来の裁判機関であるというケンタッキー大会の主張を支持してしまうことになる。中会として審議されることは、中会によって資格が与えられ、按手が施される聖職候補者や聖職者を審議する大会の権利を否定することだった。ジェームス・マックグレディは、1805年にカンバーランドグループを資格停止にした大会委任委員会の前で、カンバーランドの聖職者たちのために、この点を主張した。しかし委任委員会はその要求を拒否した。ケンタッキー大会は、和解の条件を討議している間、同じ嘆願を拒否し続けた。

両中会は1812年4月7日に会議を開いた。カンバーランド中会は、西テネシー中会にはユーイングとマックギーを、ミューレンバーグにはロバート・ベルとジェームス・ポーターを協議のために指名した。西テネシー中会はカンバーランドの聖職者たちを中会として審議するという要求を受け入れるのを拒否した。同じ会議で西テネシー中会はカンバーランド聖職者に対して、冗長で悪意に満ちた「牧会的手紙(Pastoral Letter)」を書き、それを500枚印刷し配るように命じた³⁴。ユーイングは、一連の5通の辛辣な手紙に返信した³⁵。しかし、西テネシー中会は、カンバーランドの教職者たち及び会衆たちが、長老教会といかなる方法でも関係することをもはや認めないという決議を通過させることによって応酬した。

33 西テネシー中会の議事録。カンバーランド中会の前メンバーであり、長老派歴史家に全く教育を受けていない者、と記されたサミュエル・ホッジは西テネシー中会のメンバーだった。Davidson, *Presbyterian Church in Kentucky*, 256.

34 1810年から1813年のカンバーランド中会の議事録、1811年10月11日、及び1812年4月7日参照。西テネシー中会議事録、1811年9月16から17日、及び1812年4月7日参照。写本記録 *A Pastoral Letter...of the prosbytery of Wost Tennesse*, 23-52を参照。

35 ユーイングの「返信」と共に、カンバーランドの教職者が仕えている教会へ“Pastoral Letter”も送られた。

現在カンバーランド中会と呼ばれている人々との一致は、不法で非中会主義的であると決議する。³⁶

カンバーランド中会は、次の動きを検討するために11月に集まった。フィニス・ユーイングの西テネシー中会への「返答」は、「宿命論に関しては、信仰告白に我々の例外を提示しているだけのことであり、我々が支持している教義体系はまさしく信仰告白から結論付けている見方である」という意味を³⁷ 含んでいるものとしてうけ止められた。それでカンバーランド中会は、次のような決議をした。

ミューレンバーグ中会と西テネシー中会の兄弟たちは、和解の精神を表明する代わりに、公式に、二つの教会が親しく交わるという扉を閉じてしまった。それ故に、我々の教会は、実質的には、再合同に関する巡回書簡での我々の宣言に従ってきたと決議する。

ミューレンバーグ中会と西テネシー中会は、さしあたり、二つの教会間の合同に関するあらゆる可能性を断ち切って来たと決議する。

我々は一般の長老教会と、適切な原則（principle）の上に、合同をすることをいつもいとわないし、準備もできており、そしてこれからもそうし続けることを決議する³⁸。

カンバーランド中会は、1813年4月にビーチ教会（Beech meetinghouse）で会議を開いたとき、長老教会との和解の希望はもはや残されていないと宣言した。カンバーランド中会は、急速に成長したので、以下の教職者から成る、ローガン、カンバーランド、エルク（Elk）中会から構成される大会の設立へと計画を展開した³⁹。

ローガン中会	カンバーランド中会	エルク中会
フィニス・ユーイング	ヒュー・カークパトリック	ウィリアム・マックギー
ウィリアム・ハリス	トマス・カルホーン	サミュエル・キング

36 1812年9月22日、西テネシー中会の議事録参照。

37 1810年から1813年カンバーランド中会議事録、1812年11月5日参照。

38 同上。1812年11月6日参照。

39 同上。1813年4月8日参照。

ウィリアム・バーネット	デビッド・フォスター	ジェームス・ポーター
アレクサンダー・チャップマン	デビッド・マックリン	ロバート・ベル
		ロバート・ドネル

10月に、テネシー、サムナー郡のビーチ教会で第一回目の大会が開催された。カンバーランド中会の名前はナッシュビル中会へと変えられた。大会はマックギーを議長に、ユーイングを書記に選んだ。二つの重要な決議がなされた。一つは、「カンバーランド長老教会の起源、教義、進展に関して……同意がなされバックス (Buck's) 神学辞典第三版に印刷されるように命じられた」。これは、「カンバーランド長老教会」が独立した一つの教派として初めて言及されたという意味で注目すべきことである。もう一つの決議は、「この教派に特徴的な信条に一致した信仰告白、カテキズム、訓練規定を起草し、準備する」委員会の指名だった⁴⁰。その決議は、『ウェストミンスター信仰告白』と4つの点において違っていることを明言していた。

- (1) 永遠の破棄はない。
- (2) キリストはある一部の人のためにではなく、全人類のために死なれた。
- (3) 幼くして死んだ者は皆、キリストにより、また聖霊の聖めによって救われている。
- (4) 神の御霊は、キリストの成し遂げた贖罪の及ぶ範囲、すなわち全世界において働いている。

それゆえ、あらゆる人に弁解の余地はない。⁴¹

カンバーランド大会の組織化によって、長老教会との分離は完全になった。1805年12月から1813年10月までの和解の努力の中で起こった複雑な出来事は、分離の問題が明確な線引きが出来なかったことを示している。カンバーランドの教職者たちは、中会、大会、総会と論争した。もし、寛容と忍耐が様々な教会会議で示されていたならば、おそらく和解は現実のものとなっていたであろう。ようやく

40 この委員会は、ウィリアム・マックギー、ロバート・ドネル、トマス・カルホーン、そしてフィニス・ユーイングを含んでいた。1813年から1817年のカンバーランド大会議事録参照。*Theological Medium*, X (January 1879), 96-105に再録。

41 カンバーランド大会の議事録、1813年10月6日参照(カンバーランド長老教会日本中会編集『カンバーランド長老教会信仰告白』2014年版訳を使用)。

1823 年になり、ケンタッキー大会は、フロンティアの地に新しくやって来る人々に対して「『カンバーランド長老教会員』と自分たちのことを呼ぶ人々は、我々とは全く教会的関係のない人々で、さらに正しい中会主義教会の立場に立っていない者たちと、我々は思っている」と警告するために、『短い歴史 (Brief History)』を出版した⁴²。しかしながら、二年後、長老教会総会は、カンバーランド長老教会は「他の教派の人々と同じ考えを持ち、我々の教会とは関係がないと見られるべきである」と宣言して、カンバーランド長老教会に対する明確な認識を示した⁴³。

42 *Brief History of the Synod of Kentucky*, 1 を参照。

43 *Minutes of the General Assembly, 1821-1835*, 145, 148, 155-156 を参照。